



精吟

白羽

美浮松

蜻蛉

卷名を豆りて早止とい巻八は
舟君は力りけあひ懸三具のり
八月よりつりて秋まての事あり
董二十六年アリ
五月二十一日
いみ教終れ
て作者終り

物語の非君れ

漢松のねりしや

小あひらまとの世の月よりあは

世一はを終らんといハ 白の京よ

海に新とんとまゝのめおりの首
ののりまゝもい母の戸むくんとまゝ
西方のめくたれと 雨のりまゝと
らあゝ 勿怖と

西にまゝありやまゝと 海舟は力と
まげし聖日西とまゝのまゝと
信院とて信教のまゝとまゝと
申たまゝと

むと承りしとまゝと 白まゝと
くまゝのまゝとまゝのまゝと
とまゝのまゝとまゝのまゝと

帝尺とてしを 梵天帝尺ハ人曰法に
とまゝとてし 帝尺ハ切利王のまゝと
まゝとてし 帝尺ハ切利王のまゝと
善相とてし 帝尺ハ切利王のまゝと
とまゝのまゝとまゝのまゝと
の記と作まゝのまゝとまゝのまゝと
記は石叶別は帝尺の人の死とまゝと
しまゝとてし 帝尺の人の死とまゝと
い記はとせん方りまゝとまゝと
れまゝとてし 帝尺の人の死とまゝと
人の記はとせん方りまゝとまゝと

河 揚貴妃

歸唐帝思李夫人去漢皇情乃海

ハまゝののうゝあり

くふりそまはれ止 白まはれふひはり

申るはハ母君をうゝ孫をいへ

ゆゑのひはらん 伊勢物語の鬼を

一ひしふいふりとも此河の中へ回經大

神をその二條をとりやうまゝいと

鬼とつるゝ伊勢物語の鬼ハ人々を

云詠の鬼といふあはれ又詠し小ね帝

の時仁和三年八月武徳殿のむらり

を鬼食人は是則大怪ハ日木之日の帝

崩落は是其徴歟

まほののゆや 説文云狐ハ妖歎之鬼

而末之ま寛平年中備中四ノ賀湯

良藤狐ひそれて十二日倉の下にあり

しりあり

昔物語はあふれもの 上の句は鬼をいへ

まへはゆりうとらひあり 女こそまは

あまののり

りまひよあり書き 歎まひかゝると

つとまゝありし身はふくまのまゝあり

いそりき程ありとろし方ありと

後乃て 母ありしをみみしるん
少くしり

御車にせらるる 何 孝成白皇帝回馬

同黄帝不死と有家何ん或回黄

帝已仙上天群臣葬其衣冠史記

日本記日本武尊白鳥陵より出テ

上天タミウ群臣其衣冠葬マ

めろこのちと 海舟の乳母此子の夫

徳や

たましくあり 定原のまは敷井人あり

内舎人ちとちまあへ

法師のつらうとて じらの八徳の

棺乃ちあり別はほりり人々死人の

あつらひとて葬しむる例也

例のさび有事とて 入櫃拾骨

まじりのみなり

人々の死る人ハ かく親も人のみり

言ふまじり法ありひとて 白

まじりひとてあまきとてはあつら

あつらひのねんともなり

あつらひのあつらひ 初書あり

あつらひのあつらひ 初書あり

よき人ほてきしといはましとて
けうあぢんとといはてけうの
入道まのにもあひておとる
かこまのあまこし董に中より
幾のふあり

大蔵大輔

仲信う事なり

きよせのぬ

よのほのぬえり

おのひとてあつこなり

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

まのせのぬ

てしはのあひまはく目あらはる
このひまはくはのあひまはく
てしはのあひまはく
てしはのあひまはく

しあはれはくはくはくはくはく
しあはれはくはくはくはくはく
しあはれはくはくはくはくはく
しあはれはくはくはくはくはく

昔はくはくはくはくはくはく
昔はくはくはくはくはくはく
昔はくはくはくはくはくはく
昔はくはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく
あはれはくはくはくはくはくはく

八雲の歩子よしかくうらとくこし一ぬ
まよ事よとまり

人げくされよ の 人水本名皆有情不
如不逢傾城色 文集 一程と思れぬ
まよ事よとまり

まよかめあひあり 兄才たあひ人こし
まよ事よとまり

まよこりりまぬらんき 三十一日探
まよ事よとまり

月まらしてまよとまよ 卯月廿

十日事よや海舟のまよよちね殿ハ
卯月十日とらんまよのぬひらまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい

まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい
まよまよまよといまよまよまよとい

君から来た
お世の屋のりとはおのりせつふ
まうんとおのりいふらうらうらう
おのりいふらうらう

おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう

おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう

おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう

おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう
おのりいふらうらう

人ふとつむらめふしとねく

人形おしりおむりしりり

歩車のちらとりのして けいふある

西してち搦のくしは野かこま

見ぬらこいひて 多法と八ふあ

少しおひひるよころあかりり

我又こいあつと ころいさこまあ

ふありあさまき

うひきし ころを貝あたまのけりる

何の貝よぬころりてし 百集あしん

あかふあししとて書おしや

例乃家よ ころいさこまき

降あおしやゆぬりり

あさまきあひら ころの又いしん

ちかやんといふは母よころり

ころいさま 使してのぬりり

ころいさまいじあしれきころいしん

ころいさまゆんをころいしん

まは死人をころいさま

あさしひあししていさゆぬあり

ころいさまき 母の又いさ

はましあんと ころいさま

とらひて申すにふしむるは
まじしあり

くじさいの帯 斑屏帯は位女位人
常用する歸服者ハ鳥屏帯ニ諱

斑屏ニサス

此帯ハ名宛あるにまじし申す
くじさいの帯ハくじさいの帯

くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯

ありと賜ふはくじさいの帯

ぬんくじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯

六十信 六十信ハ大盤着博信時

のまじし例ありとまじし申す
六十信信をくじさいの帯例ハ七信と
午信の中しまじし申す

くじさいの帯ハくじさいの帯
くじさいの帯ハくじさいの帯

新羅

まよひにまひるをて 廿三

歩道ののちりていふまにたはりていふ

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

歩道ののちりていふまにたはりていふ

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

歩道ののちりていふまにたはりていふ

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

歩道ののちりていふまにたはりていふ

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

とまよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

とまよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

まよひとあぬはた歩のちりていふまにたはり

おしりりせのううけりくあん

小字相うらて書よるううてを

まかりかりひきまんとやうて

あうまうらう人よ 小字相うら

ひらぬらの信舟此の法歌終よ

あうまうらあねと教あぬが

ハとまてしでせぬとちり

かきめし 書札あ葉蓮よくあうら

くもく信あまやを世し人の勅

せぬうらとくうらうまあり

あかしくもやうらう

はあやとあうら世あうら ぬらの

せあうら相うらうらあうら

こえうらひ くうらひあうら

いしうらひや ああうらあうら

りてあうらうらうらあうら

いしうらひや けしあうらうら

ぬらうらあうらあうらあうら

あうらあうらあうらあうら

いしあうらあうらあうら

あうらあうらあうら

あうらあうらあうら

相ハムサキマシキ

トシテカクモシキ
ムサキノ

アリトバタシキ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

蓮のむさりふ歩八海

中交のむさりふ歩八海

糸院としてのありき

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

中ノムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

ムサキノ

むとくをうめくすしあめりこ 白
のまおくるりゆいあぐらりいこきさ
まじまじまはさやめぬよらりて用付
ぬもぬりやとゆりり
例ちぬやきまらり ぬしとぬり
あちりしやりしてち武よ 女こまは湯
方れ女房りりし
秋方に づひれゆまらあり
らくくひゆいゆ 信側こゆり
くぬまらりりりり
元蝶の巻りしはこまあり月合

て料簡とくしとて

まよりまて 漢皇本まんりるしりり
一あまよ津又いまらぬや 昔董の記
一あまの又いんゆいりるぬや
二夜やあらちゆ 夏のりゆいん
む甲よ海からうりや
ゆいえぬ入りとらんや 白まゆか
まし似ゆらとられ月ぬまこ
終はりしゆく 白まゆのしせて
ぬい(おん)ぬまらり
女房しああらし 女こまのしり方

（後）はまらふらふをぬいてやうふふ
しつゝいふふふふふ

ち將とらふふふり 中まははふふふ
いふふのしつゝいふふ

しつゝいふふのしつゝいふふ
あふふふふふふふ

あふふふのあふふふ
いふふふふふふ

あふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

らふふふふふふふ
らふふふふふふ

歩ましくあゆむ 中女の歩る前へ
まんとむかひの歩る人さゆりぬん
い歩方れ^たふらんふ 女二女の女房女
らぬのあり。

とひりて あゆみのわく中さあふ
ましあかしくるむらしあふあつう
とふ 何つぬすしあふ

いまひあゆむせぬらん 一お女の
歩る口のちをゆくいひら
人よりいふをぬて 中袖をぬき
あゆむらんしあゆむあゆむらん白女

のあゆみよひいひいひあゆむらん
まし小掌おりくせしあゆむらん

まもりのせぬ 中女の歩るらん
いし見くぬし 白女の足事あり
いさやうもぬき 中袖をぬき
しうしゆひらりぬ 中袖をぬき

洋のまもりや又ハ字路りあふ
らぬまもりあゆし

宰相の里人 小宰相の許りやぬ
いひらあゆむらん
まもりあゆむらん

えりておるり 中々の事白く

ふいふおくちまゝとちいひおし

女二交りり廿二交りおるる

お中まゝしおくして

ぬきまゝあり

ちお後じらまらりて

ふりおるはく廿二交りおるる

廿二交りのおのとは若 いお徳と母

おほくもくさるるおぬるるを

若十若りりまゝとちおの若

みおるる

りてりておるるおるるへりてりて

おらりてりてりてりてりて

つらりおるるちひく お徳の女二交

のちひまゝりてりてりて

おはひのめりりりおく ちひ乃

ちひ乃のちひ乃

おは乃のちひ乃ハ若れ人 物乃乃

ちひ乃のちひ乃のちひ乃又おる

ちひ乃のちひ乃

ちひ乃のちひ乃のちひ乃ちひ乃

ちひ乃のちひ乃のちひ乃ちひ乃

ゆりえりあり

ふりぬる髪まきくさり

まきくさり

栞の女乃れあり

はさげりりあまき

まきくさり

ふれてこりよきあり

そりけ船にあつてこりよきあり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

あしつらん せりの中あり

りのりぬるまきくさりの

まきくさり

ぬんこりよきあり

まきくさり

のりぬるまきくさりの

物の表ありあり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

まきくさり

むらうしん 三食相りり

やぬやしん 三言事つる

しんのおん

人うまぬ世出つるもせしはまゝに

むらうしん 三言事つる

りーのあはれやん 三言事つる

やのむらうしん 三言事つる

あひてやん 三言事つる

やのむらうしん 三言事つる

あひてやん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

ふちくしん 三言事つる

此のいしあはしうのやふしを
やういふはあはしうのいしは
ししあはしうのいし

常なるいしをいふ

らぬいしをいふ

ししあはしうのいし

ししあはしうのいし

ぬしあはしうのいし

識のいしをいふ

あり

あはしうのいし

とあはしうのいし

物もあはしうのいし

あはしうのいし

行性もあはしうのいし

あはしうのいし

いしをいふ

えんい物もあはしうのいし

あはしうのいし

あはしうのいし

あはしうのいし

選は友其人た立明恥立亦恥といふ

りた今集歌と和雜波の浦かゝる
し人そよしぬるり

くちほほくくんとくくく

れ かくねつらうはうんくはりう

うねの操しりまを霜雪体とし

らん常態よ常あつりとり

あしらのひきり れ ね他りせうかやり

あこしら 後まは女房とりまは使人と

りま

毛ぬい髪とついでくりて じしのはたかき

止尾といひて、顔の髪と唱食り

やうしんくうり

あらむらぬ けいこく

かえりひちのねり り 蓮葉のいこ

のふちまぬふしてちの八房とむしあは

しく せ川あえりハ道ハ濁りまのり

根り道と清おまりからりおんか

世はのりくハ清くやうりましとんハ

濁りれり。濁りりまのりりりり

又りまぬらりうまあはん人

形はりりしやひてまうりまのあはん

男うしとあはあまうりあしとまり

かきつりうりうりありとも 胃はひりり

方をいともあひうめい女乃らきりて修

とけいしをゆせりてさきとせありぬし

やうや

さやうおんさうらうさく くらくの中

せあせめくまきしり

さうていふののり 上品の務せり

それのふりおきり

あんとくへ 物おくせり

おんくち ぬふりしりよらり

はまぬ舟の 冷^{ひや}平若不繫舟

舟はほくよとさくりませしてし

いとつしき事おけさうの舟あや

まののいともぬえれ男はなす

女のをうらう男は身とあし相り

せりよらうのあやなりあらは

きりしりよらり

おけいけいさあぬひあんと大事

なりなれ 是ハ男也 此ハ女

の指いさあせりさくさくひて

ぬのりけいさくさくさくあは

はちりしりよらり 月乘のぬえ

りし出づるれは申將ありりしこの暇
看ばいりしめしむの御下りしや
又しんきんていしなはらむるや
おのめしむしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは

馬頭ゆゑのれをせひりて

れ
一切の事小博士せしりしあり
えりしやよひりしり博士ハ信達之士
せしりしや
れ
おのめしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは

れ
うりの事しむしんりなは
れ
馬頭ゆゑのれをせひりて
のまらむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは
しんきんていしむしんりなは

乃はい下の脈よむしありし事た
ぬふひよふり出さぬりくの
脈り書しけきるこまのけきひ
とよは花経の之図説法のす
ふそけり之図とほは説一周
周囲縁説一周りは説一周ハ
りこのふハ並よは法の道理
めてと根の聲同舍利弗に對
さそせしむとは説より次
論説一周ハ聲論ありはあり
は説の述成授記あり足すハ
舍利

弗よ對らくの説はり其次の脈よ
車二のよとて之業終よ二業小
ゆすゆむむのて中根の勢
從迦梅迄迦葉目連よらそ
解子藥草論ありと論説の述
記り次周囲縁説一周ハ化城
品ハ過去久遠印よ大通智
如來のは花と説行と一ハ
窟の思ひしりて小業と終
又尺よ此説はと四心向大
りよる周囲縁と説てト根の

以才小授記と云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

きくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

きくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

東原沙書可有別當善人類

すまふしと云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

目小見ぬ鬼乃類

鬼魅ハハ書ハハ物馬ハハ雜書

きくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

山の字ありて世にりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

墨の濃淡と云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

墨の濃淡と云ふは乃は程と云ふこと
くしくとくしりてしよと云ふは乃は程と云ふこと
とくくといふ程のすまふしと此物物の化
りく相似たりと云ふ世俗文字の業は
言辭の深とありて佛の言辭の
因持は悔れ縁とせらるるなり下せし
中将たりと云ふ是しは師の世にりて
用事ありのふらと云ふは乃は程と云ふ
けりたりし

うらうらひ 心知りもつたひ
きつて見ゆと 諸中りもろく
しよひのりうして 関乃若く関の
うゆよのうき別のとくばりして
ろり申すくせゆ

れ 木の道給而も書未あまのり
りりまきくうりまきりいんわ
人のうはやとりまきり

信とて 興とてとりまきあり
は乃師世のとり 花鳥は益園
のこ流の流はとてのまきり

うまはと中下根の人乃まきあり
りとりは流は二人のとりよと中下根
あてとりまきとてまきくまきあり
あとりりや流氏若ハ世流まきり
あとりりまきりまきとてのまき
まきとくまきとてまきとてまき
あとりりまきりまきりし文集大
路は借丈婦以朝若長く不終也
とり

もまき下筋のとり 子取
とり申すとりまきり

流るる世にやうし ちりむささな

きまのうししのうらけいばはむの

あいにらうら思ひまはむの

もまよひあはれ

あはれやのうし 千妻はあはれ

うらけいんらうらうし人かた

もあはれ

おらうら ねおきさうらうら

うらうらあはれやうらうら

あはれ

いそこの人らあはれうらうら

あはれは馬頭うらうら

うらうらうらうら

すのうらうら

あはれうらうら

うらうらうらうら 此女

馬頭うらうらうらあはれ

うらうらうらうら

うらうら

あはれうらうら

うらうらうらうら

外人不見く應笑え集

木

比人ありあしく見しそ思はせしを
あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり り 形遠

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり り 形遠

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつんとりよるあり

あつたしとるなうりあり

ふれうと公日ひし 二やハニまや

とよしとるなり

あつたしとるなうりあり 又よとるなり

あつたしとるなり

あつたしとるなり 賀茂傳

時系調樂十一月午日お北陣梅御屋

有儀或有郷食膳訪孟ホ

い月しとるなり くの和れり

余情ありし

あつたしとるなり 別と

家海とゆりしん方ハまむなりけり

あつたしとるなり

あつたしとるなり 木拓りとな

あつたしとるなり

あつたしとるなり すまあしなり

あつたしとるなり ちとるなり

あつたしとるなり 解し

火下のしとるなり 耽く遠燈情

碑新

あつたしとるなり ちとるなり

あつたしとるなり

と申に申しつゝもすゝめり申すは

此女も^我おぼまつりて男共は

りちのあしきつゝもすゝめり

見よはらの女人の心も

ら
心身サウゴ

親の家りいふもりつゝも

ちのせういひつゝも

あしきつゝも

ひらむこころ 直隲た一向は書

心もつゝもりつゝも

ら

あつゝも 男共おぼまつり

らつゝも 女共おぼまつり

あしきつゝも

あつゝも 男共おぼまつり

あつゝも 女共おぼまつり

あつゝも 男共おぼまつり

あつゝも 女共おぼまつり

あつゝも

あつゝも 男共おぼまつり

あつゝも 女共おぼまつり

あつゝも 男共おぼまつり

らたのうらり

つまひきて月せり 引せなうりも

うして妻物の綴引すうらるるきり

と聞 うら六女のくりり引げあよ

らてはさうなれてのらくゆらり

たうませり、あつめわとくたそくを

月影とぬりまはあけぬまてうまき

うめさく ふうくこぶじのうらり

りくならりあうあおよ

をさうハセタつのでたおろてさら

のよこはあけさうあうけり

セタのりくならりあやうら

うやとけいようりりり

もけりい花お葉しよき り花のうま

あかちとけいりてはあはる申こ

はあひうらまはれりうくぶじりよ射

ちくうらまはれりいしんをせり

きこらなり

人もあらゆり 本まより終始を

まはりちるくりり

あらしん 奇の申あり

月あつてもりく 月うれとらり

とじりせいのひらめいひらめいしりり
しりりよらめいしりりしりり
しりりめいひらめいしりり
しりりめいひらめいしりり

あふふ人 しましりり

大徳云の家り ねらめいしりり

縁あり人しりりしりり大徳云しりり

あつしりり

あふふ人しりりしりりしりり

あつしりり

あつしりりしりりしりりしりり

あつしりりしりりしりり

地乃水けみして 水と甲てけみ

しりりしりりしりりしりり

柳のゆめしりりしりりしりり

しりりしりり

とじりり しましりりしりり

風りしりり ありしりりしりり

しりりしりりしりりしりり

あつしりりしりりしりり

あつしりりしりりしりり

あつしりりしりりしりり

凡そ元しハき水より今と暮ハる
りよまきり一況飛鳥井ハ暮しあ
心清水こ二条百里坂路りありと
しりけくまハ味より文選大人賦
云嘖ツク懷ツク華ツク淫ツク味ハ食より文章口ツク
作云く

律のろく 花 飛鳥井ハ信り余七律あり

呂ハ双調律ハ平調也

とのくきり地乃於りれし 和琴

り五ハとの此より地より

一線 首七つよりとや一妙ハ

庭の紅葉も踏ふも秋はせはげま

しく移ぬま 秋ハきぬる葉高しゆり

ういぬ道ちまふてさよ人せし

く此女はさかまはるる移しを

いさまも此かり人のさよし聞て

りよ依りうまハ本ありとくあましけ

きり移りりさやよりりましお

せり移りりまし移ぬえりりり

下の音うりもつまりり人となり

そのしきり移りりいりり移りり

はハ移りりましりりりりりり

くひいてかへたてまつりて
又かへたぬと流あり曲もなり
おしし

琴はまもも聞もえおしぬ
りつゝあまのりりきりかひり
じあやえきぬとらりハさきぬ
うあやり又えきぬ花やしらハ
まんやりりささきぬ又後きぬ
とえぬぬしりきりせとりさ
かえりぬハさきぬえきぬや
まんやり 早下のりりりり

きあのりりり
とと聞もやとと人のあ
はもやとハ歌うりこ人のし

よまはにいけり のうしぬと
あまきくれし ぬりあまくれりり
まじしふ吹あまぬり いふ人と
うじたまのらりりりりり
トトとらりりりし木指り吹合
すうとはけきり神を月うり又とあ
えぬりりりりりりり

このしは 菊のちりりりりり

安いけいしんをいふまゝにまゐりて人々との
前一本の道畫工のしるしはあり
しくおぬむのむしきし用ひてその
を別より行事しをいふてし

中ふり的事とあひのほあふり
おんりあふりききり

わつしやめくふみ秋のあり 引き
せしむりやあひのいふりきり
しまのいふりすれふあふり
かあり
えんりあふり ころり

ししきりあり

七世あふりのいし れヨ 櫻樟七年とりん

今そのふ七十年しりしは我よりいふ
者のあふりよふりありの事

いふありと七十年と七十年たえ
いふあふりしと并ての教とせ
り及そあふりふりのいふりや

すれぬあふり は 姫 スキタム

ゆいしきり かしきんとしり

うまきり 美りぬえりあり
りいふりありありありあり

おぼろしいらんとしてくつろがわ
しられりきんぐまのぬ中とれん
れりけりて 世中乃夢はりてを
かりけりれりる恨らまは
又云引きあつてせりり
あはたかりてけりん 女はりり
おろよりまはるかやうせし
おのほり事ありてありま
取仲るりりおまはれり
おやせりて 夕ふの又云位中ね
のりり

らんといんをり 母のぬ中ね
のじきまはり
この月夜うらまはり 女はりのま
乃のりは女はりておれぬあり
てよといま務らかりぬりハタ
あはりお近くははりりりりり
りりりり
ゆかりいおろりありしふ ちり
の君れりりり
又乃いりりりりりり 人のるん
とらんてのりりりりりり

いさやいなる事やねんりまや

やいしんしんし物まより源は流る

らりしてゐるねん

らりしは流るあらしも 若松早下

あらしやまうひとありあれしはま

ありしそしはまうひのうし

じいねんりのめして うらのかし

ひらぬあらしのしんぬれより花

あらしのしんぬれしはのめし

あらしのしんぬれりや

らりしは 塵はしんぬれし

あらしのしんぬれしはあらしの

花 夕秋まものしんぬれし

てまうひの事とありしはしんぬれし

いひぬ申ねらりしはしんぬれし

あらしのしんぬれしはあらしの

らりしはしんぬれし

らりしは神もあけし くららら

らりしはしんぬれしはあらしの

あらしのしんぬれしはあらしの

あらしのしんぬれしはあらしの

あらしのしんぬれしはあらしの

あしはし

こけりくせあし かねたれん

りやくんしとくませんし

まぬま せりありとくせり

しましなみり 吟 オスラウ

らあし あし ちまひりあて

一ちのあし あし せりしとくま

こまのあし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

はし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

あし あし せりしとくま

くらくらおぼ　世にハくくおぼ

さしてつりおぼとあり

くまをい　終乃つあり

おぼけつる　佛はめさしてなり

くまをい　無きつりきあり

を解てめさうおぼりくゆらん

とやハおぼめさくおぼとあり

あてし事　りんとてしおぼして

しおぼし　文章博士生少し

あつちをあり

くらくらの道　聴我歌二途富家女

易嫁と早軽其夫貧家女難嫁

々々晩者於姑文集カニ

口をハ貧家ありとありあり

むくく　うき文とあり

うやま　ぬ見ハ詩おりの作文也

うきを侍おぼくおぼとあり

とやあのとあり事あり

じさいの人　無き

おのうとありおぼはゆり

あ言男子ハ進退やとあり

女乃らとありとあり

りし事りりししとくものむく方ゆ
のしりしとときりて下のしとんは
見ゆしすく辨ハもくせしとん
とのしとハらんとのしとんむを
しれ名の流ハ別し
らみしとよりとよりとし 抑しき球
ねんしとよりらとより一本球の
きくくしあり
るのやう 腹痛之又ハ風痛之と
え移らホウのさくやく 炎天之ま
業ハ元カとりおこせ 見れ多

はのあゆりうとんとせ 力つてりげ
てましとよりあり
らししとや思きん したんぬのり
いせとくしとよりあり
らとんののうまひとんは 然せこり
くいとのりらとんととのめか
まひのりらとんやんこのきり
せしんはとらりぬしとよりと
のてくしとよサしとまふとのら
とらとらりあぬとつひりやと
らりりり

あしほくろや 元 改約うへにけて作
りかたを申し記のいさく世
のいさくしに記すいさくれ
おしほく 曲しんといさくあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり
いさくしに せうろしきあり

此河の批判あり

これら方の事と乃りあり 智者言未
必思て後大辨如詔 考の經訓ハ日ヨル
たり居しいてしものれ者此方下ぞあり

必思通云

三史五經 又二歴あり此方かく三史

のましとぬとりり三史ハ史記前

漢書 後漢書 五經ハ毛詩

尚書 周礼 礼記 周易あり

あいにやう 愛敬

形は女といふんうん 女として世
母あま事なり一向りうとしてくらあ
わしとまりしふれ武部つとま
りしとまり
らうまといまんりは へやういおごり
きねととしてとらうりあり
廿二のあまやめりちうら 又
の事とらり
とねごの中いせ ちあふいん
いんくりにし
すんてしきあつて 他つりし

ぬりりちあり

五月のせらよ れ 六月八日 節入り

若白とあやめりしとけねいて
武徳殿より幸あり内弁外辨お
き會のしと交内省於高蒲内約
蔵人讀命ツクナノミ 群長よけふ三蔵と
りて六府騎射の事あり

何のあやのせやいさひめれぬ

廿あやなほやのせとぬまをす
かといふとやれしお仕とち事とれ
りるりりしてその外のりかえあ

ふつぬりしきり

三上りぬぬとのさしげ 廿三うぬぬ

とさぬりや

九日乃事ありまひる此詩は久松

皇陽夏は三月南殿より出御有

て内辨外辨あり文人博士とのまれ

てむとくまひくあてしあく説

字と探と詩法依りて又書の上

て海すかり之然有て水真と

小舟帳のた右より葉更の袋とのひ

はく舟前もぬれと籠よりして之

新古今代夏此依認めりまありて宜

湯殿より平座とて上つ下着座

ちくも此酒とぬりやせりるのり

ちりりまひる詩のさくとい

かしこりありりハ雑依の歌

詩とあますりけ言あしりるり

ハ詩は依りるるり次のことなり

ものありしつるハ言れ事なりし

とありしとせよのりつよはた

のりしとせりるりたてしゆり

もあつてりるりなり

あはれいけり ^一あはれいけりいけりいけり

今

まりの事いけりいけり ^花あつた

うらつたいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

又云いけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

あはれいけりいけりいけりいけり

中道とていふものなり

つねくしてくは 霖の晴るなりし

たはむとてきりていふなりしゆり

あまのあつちりて日のすけりて

よしなり

かたし ^{二編} といふなり

まの人 田より人なり 真人

中納言若中務 ^花 中納言八原氏次

磨へんくらのゆり一承さらなり

まのり一人なり中務若中若満を

り原氏よりいふなりちまのゆり

まのいふなりあつちり

白人 ^{二編} といふなり

ゆり ^{二編} といふなり

り八原氏のゆりていふなり

り八原氏のゆりていふなり

すのりていふなり

まのりていふなり

たのりていふなり

あつちりていふなり

り八原氏のゆり

まのりていふなり

かきあつておぼろやと云ふ

あまふ ぬ あれいふまゝうらぐしの

うらぐしのぬまふまゝ

りく見

ふ二針の言なり

さし

さうしとらふまゝ

二條院やゆめすらすと 内裏もた

ちの音あそひ言なり

中河

との系流川なりこそ河と白

河の中りかたりりて中河と云

なり但流と多しき

りてうらりり ほんうのいふまゝ

牛りく

乳依もろくうらやまを

あそひなり

むらうのいふまゝ

茶との流るるいふまゝ

て又けいふいふまゝ

ほんうのいふまゝ

けしうらきまゝ

源氏君のまゝ

しるしとらふまゝ

んらうせ居のいふまゝ

虫のいふ

三月のいふまゝ

はくせん

しんごふまきあて

照り

いづれいひも

おのれのいひ

しんごふまきあて

ふいふまきのあて

風俗王

まのり

ゆひあつるまき

空様ハ又

ゆひあつるまき

まきのいひ

夏ま

つらねハ打夜又

れりま

あしつひ

は又ハ

じつりて

らま

まのいひ

あつるま

まのり

まのり

ゆひあつるま

まのり

ゆひあつるま

まのり

しんごふま

ゆひあつるま

まのり

まのり

まのり

乃よりいぬるのとき

一編 三奇事ゆゑにいふに

つゝはる殿との中さへ 日くハ殿として

昇殿うゑり人なり

とちりやうをいしそハウのうのうあを

りくしてハ 海 船加伊戸波ハトハリ ト 横控色奴

礼方苗平控くま養を百世元巳余世

を養明た可奈余奈余と外を安波

比た多字加よ外に本は比た多字

加よ外に

源氏のゆゑにのうらやうくしてこの

ゆゑに大君にせむせむとせんとしよハと

ててやひあゝるやもものみ法用給

てぬらよま給しえりれちう何よ字

じしえいけ行ちんてりゆりあや

しなる法ゆふとまのせくくあふん

とてえ控をぬらうとてさしむけり

いりやや得る糸の珠家の冊のど

しりよまんとハもんのうらりりあ

れハあかりハ編合なり いよのうま

伊文のどけうとあり いよのうま すげとつるハ長官と次官と職章

ハ同きれり結四方の關のけりすけ
長官れりて執事と致よりして
えはすけとてり此處まゝの氣分
申とらる世例なり

あてらる あてやふらりうきなり

あ 勝人 マキヒト 妙 マキ

こなきつこ 空蝶は又なり

あ乃の縁者やまゝとあはれせや

れ 申すは此處んうきうきとて又
細長と真人とよよかとのうた
お長とてり後のやハ謎母なり

甲いげのまゝ ちりやん

とらうらり

あず あ ちん

あしはくや 空蝶とてはくしなり

まゝのうきとて 源氏書しあや

まゝのうきとて

あしとてんやハ 二乃依ありうき

とてあまひとあはれらりしなり

又あれちとてしあはれし行な

まゝのうきとて

あしとてんや

ふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一

あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一

あふらふらし時美竹の一

あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一

あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一
あふらふらし時美竹の一

りさつひつしよきし 海は白く人のち

うくさつりきまはらうや

しあはるくとやうり 中お君のゆら

あはてはるくとやうり

中おのつまは 源氏若出時言中お

てあしせしこのおま

やこのおまよ 中將と源氏ののま

り見くの人 ちての人とらよ

うさひはまよ すと引て御り

又暮まめくやうりひら

うさひはまよ すと申せり

形しあまよきし ちせ見せ

敷るぬらうり御り

いさくはるくとらん 源氏とあ

うあはるくとらん

まきくはるくとらん ちせ見せ

中しよらあまよきし ちせ見せ

まきくはるくとらん ちせ見せ

あまよきし ちせ見せ

あまよきし ちせ見せ

ちよき ちせ見せ

あまよきし ちせ見せ

今更に此の事を知るに

深代にその事ありて

ありてはそれより

ありてはそれより

らに

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

ありてはそれより

り中体用く

いひさうりけり来れいさ候のふりて
あめりもあそねぬいさうりけりあめ

あにいさうり

女しちぬ たのしかりさうり
つとひいよねもあそぬ 中あめり

つとひいよねもあそぬ 中あめり
あそぬいさうり

あそぬいさうり
あそぬいさうり
あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

あそぬいさうり

中初らあなをの緒をくし

うのあな若あをじせやうとやせんか

空蝶の服し侍あぢれ子あると記ち

りそひおまり

親のよきお 内裏さうせんといひ

し事りか

世よひしてはひひゆん

まこ子あ

ま母よじはひぬの世よひよこえ

ぬうぞぬうん ちりせうくせん

とまり又まうよとたもこちあせあり

とひくしあふと ちりハ田とさひし

ちりけはくゆせうしはなぬぬのぶ

けはハまぬくりーよまひりけせん

ちり長とま末ありやと ちり後ハ家

よあまうかろいやちりけしそりよ

ちりのうあけりし

めり乗りけはハ ちりこの何しけしちり

まじん後うそちりぬめり乗りけし

めりけりて ちりちりちりちり

ちりぬとせしちり 文飲の品よ

ちりちりちりちり 文飲の品よ

ちりちりちりちり

のめいしんぞう 年廿七 似合のりひき

のこい しましんぞうあり

かみどり しみきしんぞう

うしろ ちりぬきあり ちりぬき

みくしげ 内庭窓外 沓履を裁縫

西北陸 沓履 裁縫 見くしげ 友とほは氏のみ履

さらぬきあり

ろくしき名をくしりきん 漢上への引

ちりぬきありきりきりきりきりきり

さらぬきあり

あはれ ちりぬきあり

めいしんぞう ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

ちりぬきあり ちりぬきあり

をくもくても 女の口えさか付猪ん

じまん 多うくしとこ

あーく いら井らうらり

うーあーのふはうらーく ほうのあやふ

あーあやふらうらあはありしはふてあ

ぬきれらあーのう折あふもあ

あえんらうらうら くのらもらら

いりよらり

あやふらあやふら せやはいあ

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら

あやふらあやふらあやふらあやふら



